

「推し」に対する宗教的信仰に関する事例研究

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂田, 浩之, 川上, 正浩, 小城, 英子 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/2000146 |

「推し」に対する宗教的信仰に関する事例研究

坂田 浩之 ・ 川上 正浩 ・ 小城 英子

臨床心理学専攻教授
カウンセリングセンター相談員

臨床心理学専攻教授

聖心女子大学

要約

「推し活」は、今の日本の社会において受容されやすい宗教的信仰として機能している可能性がある。本研究では、「推し」に対する宗教的信仰に関する仮説を生成することを目的として、美空ひばりを「推し」とする現代大学生の「推し活」について事例研究を行った。その結果、美空ひばりを崇拝する心理や、カラオケ喫茶でのシニア層との交流が、宗教活動と共通する側面を持っていることが示唆された。ここから、「推し活」はイニシエーションがあいまいで、他の「神」との並行的な信仰も可能であるなど、無宗教の宗教性を特徴とする日本人の国民性にフィットしたソフトな宗教として機能するという仮説が生成された。

キーワード：「推し」、ファン心理、ノスタルジー、不思議現象に対する態度

I 問題・目的

1. 不思議現象信奉研究

不思議現象とは、現在の科学ではその存在や効果が立証されないが信じられていることのある現象である（菊池，1995）。心理学分野においては、1995年のオウム真理教事件を契機に、1990年代後半にマインド・コントロールや破壊的カルトなどの文脈において不思議現象信奉研究が隆盛した（遠藤，2002；中村，1995など）。こうした信奉の対象は、社会背景を反映して、時代ごとにブームがある。1970～80年代は超能力、占い、UFO・宇宙人などが一大ブームとなったが（小城・坂田・川上，2007），1995年にオウム真理教事件が発生したことで状況は一転し、不思議現象を肯定的に扱うこと自体がタブーとなり、不思議現象のブームはいったん終息したかに感じられた。しかし、実際には、（1）靈感商法などを連想させる「霊」の漢字表記から、特定宗教の枠組みに束縛されず個を超えたものとなつたり、自己を高めることを推進するカタカナ表記の「スピリチュアリティ」への転換、（2）不思議現象の真実性は不問のまま娯楽性を強調したエンターテインメントへの転換、

（3）医学・化学・物理学といった学問分野を基盤として、疑似科学にも結びついていく科学信仰、（4）心理学や医学を土台として、「カウンセリング」というポジティブな文脈への置き換え、健康ブームと合体した自己改革、といった潮流へと派生し、破壊的カルトを連想させないような形へと姿を変えて不思議現象に対する関心のブームは継続してきた（小城ら，2007）。

2. 「推し活」の宗教的信仰化

人々が信奉の対象とするのは、特定宗教や疑似科学とは限らない。むしろ、日本における「無宗教の宗教性」（堀江，2007）という特徴を踏まえれば、特定宗教の形態をとらないものに対しては抵抗が少なく、多くの人が気軽に信奉しやすいと考えられる。そのような身近な信奉の一つとして、「推し活」がある。「推し活」とは従来の「ファン心理」に相当する概念で、誰か（何か）のファンになり、作品の鑑賞や情報収集などのファン行動をとることを指すが、近年の「推し活」は宗教的信仰と類似した構造を持つという指摘がある（濱野，2012）。第1に「推し」の教祖化、第2にファン行動の宗教儀式化、第3にファン心理の宗教的

信仰化である。なお、本研究では、宗教を、超越的なものに関連する信念、実践、儀式と定義する (Koenig et al., 2020)。こうした観点からは、「推し活」は、「推し」を「超越的なもの」としたうえで、「推し」に関連する信念、実践、儀式であると捉えることができる。

社会心理学におけるファン心理研究は、「メディアを介した対人魅力」という位置づけでスタートしており、歌唱、ダンス、演技、プレー、といった「パフォーマンスの評価」、外見や性格や生き方などの「本人の魅力」、ファン同士の交流や流行への追随といった「社会的共有」の3側面に大別できるとされる。これら3側面は時代や社会を超えて普遍的であると考えられるが、ファン心理について測定するための直接的な項目はメディアの変遷や、「推し」とファンとの心理的距離の変化などによって目まぐるしく移り変わっている (小城, 2004; 2019)。このうち、「本人の魅力」の中に、尊敬・憧れの対象とする側面がある (小城, 2004)。従来は、尊敬・憧れの感情からファンとなる対象としてはスポーツ選手が多かったが、近年ではその対象が拡大し、従来は疑似恋愛の対象であったアイドルに対しても、「推し」を神格化し、「尊い(てゑてゑ)」といった表現で、疑似恋愛感情や同一視を超えた、尊敬、信仰の感情を表す現象が散見されたり (江南・小川, 2022 など)、「神〇〇」といった表現がファンからアイドルに対して向けられたりしている。また、作品の鑑賞、出演するメディアのチェックといった情報収集がファン行動の中心であったが、近年は「推し」のゆかりの地を巡る「聖地巡礼」や、「推し」のグッズを飾る「祭壇」の制作、「推し」の生誕を祝う「生誕祭」などの宗教的儀式に近い行動が認められる (正木, 2023)。地下アイドルのファンを対象とした研究では、ファン心理が、ランダムな事象に誰かの意図や規則性を探知する「エージェンシー探知傾向」や、自分が自らを超えた存在と結びついていると感じる「スピリチュアリティ傾向」と相関することが見出されており、具体的な宗教的信仰の有無ではなく、宗教的信仰と関連

が深い心理学的基盤がファン心理の基盤にもなっていることも指摘されている (伊藤・高野, 2017)。

3. 精神的健康と不思議現象信奉・「推し活」

精神的健康の文脈においては、宗教への帰依や不思議現象の信奉、「推し活」が主観的幸福感を含む精神的健康の向上・維持に貢献しているという知見は多い (原田ら, 2023; 今井ら, 2010; 松島ら, 2019; 西川・渋谷, 2011 など)。他方、逆に信奉が精神的健康を損ない、病理を悪化させるという指摘 (今泉, 1997) や、アニメ、漫画、ゲーム、アイドルといったサブカルチャーのファンは抑うつ、自殺傾向、攻撃性、不安が強いこと (刘, 2022) を見出した研究もある。自殺したスターの後追いやスター・ストーカーといった自他への攻撃行動、または生活が破綻するほどの巨額を貢いだり消費したりすることは、信奉が精神的健康を向上させるところか、むしろ深刻な社会的不適応を引き起こす可能性もある。

このように、信奉と精神的健康の関連については相反する知見が乱立しているが、この矛盾について、Maltby et al. (2004) は、個人として熱中するファン心理は精神的健康とネガティブな関連があるものの、社会的に楽しむファン心理や境界性パーソナリティ様の病的なファン心理は精神的健康とは明確な関連が認められず、ファン心理のあり方によって精神的健康との関連が異なることを示唆している。また、小城 (2019) は、熱狂的なファンにおいては、アイデンティティが形成されている場合は充実感が高いが、アイデンティティが未形成な場合は排他的で依存傾向が高く、充実感が低いことを見出している。アイデンティティが未形成なファンは、対人関係依存の対象を代理的に「推し」に求めており、「推し」に依存することで結果的に精神的健康や主観的幸福感を維持しているものの、その心理状態は自律的ではなく、何かの事情で「推し」を喪失したときには、その現実を受容することができず、妄想、自傷行為、第三者への攻撃といった不適切な状態に陥る可能性がある (小城, 2019)。しかし、本人にとっては「推し」への依存が精神的健康を維持するため

に心地よい対処法であるため、いつまでも依存から抜け出せないという悪循環に陥ることが考えられる。

4. 本研究の目的

今の日本人にとっては、「推し活」が社会に受容されやすい形に変容した宗教的信仰として機能している側面があると考えられる。本研究では、不思議現象信奉研究とファン心理研究の流れを汲み、「推し活」の結果として精神的健康は維持されているものの、そのプロセスにおいては健全な信仰と不健全な信仰がありうることに着目して、「推し活」の宗教的信仰化の実態を事例研究によって検討し、仮説を生成することを目的とする。

II 方法

1. 面接協力者

A女子大学に所属する学生Bさんであった。

2. 面接方法

面接は著者の一人が半構造化面接で1回行った。面接は、面接協力者の同意を得た上で、ICレコーダーで録音された。面接は1時間半ほどで終了した。本研究の目的と意義について面接協力者には面接前に以下のように説明した。

「推し活」(ファン心理)は、時代とともに変化しており、テレビがメディアの主流であった70~80年代と比べると、インターネットやSNSが中心となった今とは大きく異なる。たとえば、かつてのアイドルは大衆に共有されている「疑似恋人」という位置づけであったが、近年では、疑似友人や疑似家族、さらには「神」といった多様な役割を担うようになり、同時に「誰かを好きになる」という感情が単純な好意のみならず、仲間意識、尊敬など、細分化されていることも指摘されている。本研究では、ファン心理の最前線を分析し、現代社会の人間関係を解明することを目的とする。

面接では、「推し」のジャンルや活動内容、ファンになったきっかけとファン歴、ファン心理(「推し」に対する気持ち、ファンに対する気持ち)、ファン行動について主に質問することを面接協力

者に書面で説明した。そして、共通の質問項目として以下の項目を設定した。

「推し」は誰か。「推し」の職業・ジャンル、活動している場は何か。いつから推しているか。好きになったきっかけは何か。「推し」のSNSをフォロー、お気に入り登録しているか。ファンクラブに入会しているか。「推し」に対して1ヶ月にどのくらいのお金を使っているか。「推し」に対してどのような気持ちを持っているか。「推し」のファンに対して、どのような気持ちを持っているか。「推し」に対して、どのような行動をとっているか。「推し活」で得られているものは何か。「推し活疲れ」はないか。友人、恋人、家族との関係はどうか。

3. 倫理的配慮

本研究は聖心女子大学研究倫理審査の承認を経て実施された。面接協力者には、研究倫理審査で承認されていること、面接は1時間ほどの負担がかかること、研究への協力は自由意志であること、面接の途中でも協力を取りやめることが可能であり、そのことによって協力者に不利益が生じることがないこと、面接で得られた情報は外部に漏れないように厳重に管理し、研究終了後5年間の保管期間を経て廃棄すること、研究成果を公表する際には個人が特定されないように匿名化することを記載した同意書を渡すとともに、口頭でも説明し、面接協力者の同意を書面で得た。

III 事例の概要

Bさんは平成生まれで、面接時点で20歳であった。Bさんの「推し」は、美空ひばりである。Bさんのファン行動・消費行動は、「推し」がすでに故人で、コンサートやCDなどが新規に発売されることがないため、オンライン・フリーマーケットや中古本販売店に出される中古品を安価で購入する、あるいは、動画サイトで動画を視聴するといったものが中心である。また、コレクションが目的ではなく、物品への執着はないことや、消費行動は自己管理の範囲内で課金がごく少額であることも特徴である。

IV 面接の過程

語りの意味が明確になるように、1回の面接での語りをテーマによって4つに整理した。以下、Bさんの言葉を「 」, 面接者の言葉を< >で示す。

1. 美空ひばりへの「推し活」に関する語り

<最初に好きになったきっかけは？>「最初に見たのは中学校3年生のときで、私、テニス部だったんですけど、中学校の最後の大会で、たぶん勝てるんじゃないかな？みたいな相手と試合したときに、もうホントに接戦で負けちゃって、最後。で、そこからもう抜け殻状態で、受験勉強しなきゃいけないのに抜け殻状態で、ホントに。もう部活もないから早くお家に帰れるんですけど、そこから勉強する気にもなれず、なんとなーく動画サイト見てたら、それまで1回も演歌なんて聴いたことなかったのに、急におすすめのところで出てきて、それで聴いたのが美空ひばりさんの『柔』っていう歌だったんですけど、そのワンフレーズ目が『勝つと思うな、思えば負けよ』(笑)。私じゃん！(笑)。それが最初のきっかけです。」「でも、聴いていくうちに、意外と私、これ好きかも、みたいになっちゃって、ピンときちゃって(笑)。そこからいろいろ聴くようになって」。<『柔』をきっかけに他の楽曲も聴くようになった？>「『花笠道中』とか。それは、映画の挿入歌で。あとは『愛燦燦』とか。有名ですけど『愛燦燦』とかも聴きますし。ホントにそれこそ演歌も好きです。あとは、マドロスものみたいな、港町とか、そういう歌も聴くし。」<一番好きなのは？>「えっ…選べないっ(笑)。えー、なんだろうなあ。『花笠道中』は、個人的に、『和』な感じがすごく好きで。あとは、人生の応援ソングみたいな、結構歌われているので。『人生一路』とか。『人生将棋』っていう歌もあるんですけど、私、結構それ好きで、受験勉強のときとか、『ああもう無理』っていうときとか、結構聞いて頑張っていました(笑)。」<全体に人生の応援歌にハマる感じですか？>「そうですね。共感できたりとか、背中を押してくれたりとか、そういう歌詞がすごく好きで。あとは、でも、演歌って、割とそ

う人生の応援歌みたいなものもあるんですけど、こう、なんだろうな、未練とか、不倫の歌とか、聴いてる分にはいいけど、ちゃんと歌詞見てみたらすごい歌じゃん！っていうのあるじゃないですか(笑)。そういう歌も多いから、なんだろうな、すごく全部歌詞理解できるわけじゃないし、共感できるわけではないんですけど、不倫したことないから(笑)、ないんですけど、こう雰囲気とか曲調が好きで。」「美空ひばりさんは、声ももちろん好きなんですけど、歌ってるときの表情とか、指先まで全部使って、歌われてるから、すごく、一曲聴き終わると、1個のドラマを見たような気持ちになる。すごくストーリー性があるのが好きだなと思って聴いています」。<どちらかというとき若いときの歌の方が好き？>「全部好きなんですけど(笑)。個人的に思うのは、今、リアルタイムで活躍されてるわけじゃなくて、もう亡くなってしまってるからこそ、もうホントに幼いとき…の十代のころから亡くなる直前まで、こう…それを一気に見れてしまうっていうのが、ある意味、魅力だなと思って。何か、こう同じ楽曲でも聴き比べたりとか、レコードを出した当時と、歌いこなして何年も経ってからの歌い方とか、全然違うし、それを聴き比べるのも楽しかったりして。自分と同じ年齢のとき、こういう歌を歌ってたんだとか、こういう感じだったんだ…とかっていうのも、知るのも楽しいし。」<今の若いアーティストはこの先どうなるかわからないですもんね。>「そうですね。全部知れちゃうのが、ある意味、面白いなと思って」。<美空ひばりさんはどんな存在？神様のような感じ？仲間のような感じ？>「ああ…仲間っていう感じはしなくて、どっちかという、憧れとか、背中を押してくれる存在でもあるし、でも、こう若いときの映像とか、私よりも幼いとき、12~13歳とか、そういう映像を見ると、あ、かわいいなって思うし、いろんな…いろんな表情があるのがすごく好きで。そうですね…若いときの映像を見ると親近感もわくし、でも、どっちかという憧れの方が強い。」<どこに憧れますか？>「うーん、こう、歌を聴いたり、

映像を見たりしてると、それだけですごく元気ももらえるというか。そういうのって才能だなあと思うし、見てて幸せになるので、そういう部分に対して憧れ。スター性というかなんというか。」
〈落ち込んだときに、慰めて寄り添ってくれる方？ 喝を入れてくれる方？〉「喝を入れてくれる方です（笑）。寄り添ってくれつつ、頑張れ！みたいな（笑）。そんな感じですね」。〈映像作品に対して〉「すごく、こう…お着物着て、艶っぽい役から…あの、芸者さんとかの艶っぽい役から、男役までこなしてるの、すごいなあと考えて。私、一時期、美空ひばりさんの男役がカッコいいって思いすぎて、その辺にいる男の人たち、全然カッコよく見えなくなっちゃって（笑）。現実の男の人より、（美空ひばりの方が）カッコいいじゃん！って思っちゃって。だから、でも、そういうのって、たぶん、まわりの友だちがアイドルにハマる感覚とちょっと似てるのかなとか思ったりもして」。〈村娘役、姫の役もあるけれど、男役がよかった？〉「でも、（男役も娘役も）どっちも好きなんですけど、美空ひばりさんって、こう、なんだろう、他の女性歌手と比べたら、声が低いというか、もう、低いところから高いところまで出るじゃないですか。歌ってても。それが、役の中でも、そういうところがあるのかなと思って。…なんていうんだろう、ホントの男性の俳優さんが演じるよりも、男らしさも、でも、艶っぽさも残ってるところが、個人的にはすごく好きで（笑）。〈演じている役が好き？ 演じているひばりさんが好き？〉「どっちかという、そうですね。その、映画、映画の内容だけでいったら、時代劇とかも多いし、それこそもうホントに白黒の映画とか、昔の映画特有のセリフの話し方とかあるじゃないですか。ああいう感じだし、その内容とか映画だけを見てたら、たぶん、興味ないんですよ、私。興味なくて（笑）、でも、ひばりさんが出てるから見てるっていうのもあって。でも、こう、見終わってみると、ああ、意外と面白かったな、っていう感じで終わるんですけど。映画が面白くて見てるっていうよりかは、美空ひばりさんが見たく

て見てる、に近いですね」。〈映画作品では何が一番好き？〉「えーっ…『花笠若衆』っていうのがあって、確か、その挿入歌が『花笠道中』っていう歌なんですけど。そうですね…。」〈どうしてそれが好き？〉「えー、こう…なんていうんだろうな、確かその映画は、二役演じてて¹⁾、女性として演じてる場面もあれば、男役として出てる場面もあって、その、一つの映画で二つ楽しめるのがすごく好きで。私、もともと『花笠道中』っていう歌の方が先に好きになって、で、あ、これ実は挿入歌だったんだ、っていうのを知って見たっていうのもあるんですけど。」〈楽曲も好きだけど、本人も好き？〉「好きです。トークだけの映像も残ってたりとかしてて、バラエティ番組とかで収録されてるのを動画サイトにアップしてる方とかもいたりして、すごく話術もあるというか、トーク力もあって。そういうところにも惹きつけられて。コンサートの映像とかも見てると、歌と歌の合間のトークとかも面白くて、そういうのも含めて好きですね」。〈ひばりさんの人間性や人柄で魅力に思うところは？〉「そうですね…。たぶん、いろいろ、すごく大変な思いもなさっていたと思うし…でも、そういう中で、歌で生きていくって決めたから、それを貫き通してるのが、すごく、その姿勢が好きだなっていうのと。あとは、最後の不死鳥コンサート、有名な不死鳥コンサートのときも、裏では、あの、ベッドが準備されて…とか、そういう話も聞いたりすると、ホントにもう生きるか死ぬかの瀬戸際みたいな状況のときでさえも、ステージに立ったらそういうのを感じさせないというか。これがプロなんだなっていうのを、見ててわかる、私でもわかるぐらい、そのプロ意識というか、そういうのも感じますね」。〈本とか読んでたりすると…、あんなにテレビのスターなのに、意外とサンリオが好きだったりとか、そういう、お茶目なところとかも、本読んでたりすると書いてて、かわいいとかって思ってる。〉

2. 社会的共有・準拠集団の魅力に関する語り

「私が演歌にハマったことによって、それまですごくおばあちゃんが演歌を聴いてたとか、そう

いうわけではないんですけど、逆に私が動画サイトとかで流してるのをおばあちゃんも聴いて『ああ、懐かしいなぁ』って言ったりとか、そういうコミュニケーションにもつながってたりして。」「あとは、私、カラオケ喫茶が好きで。おじいちゃん、おばあちゃんとかが行くようなところ（笑）が好きで。私、地元がCなんですけど、Cって、ホントにおじいちゃん、おばあちゃんしかいないんですよ、まわりに（笑）。そういう環境で育ってきたのもあるんですけど、もともと知り合いの方がそういうカラオケ喫茶のお店を経営されて、で、演歌にハマったときに、もう受験勉強が終わってから、高校入学してからですけど、通うようになってそこに。で、その場に行ってみたら、みんな、おじいちゃん、おばあちゃんたちが歌って。で、私、すごく珍しいじゃないですか。この世代、この年齢で。で、初めてそういうカラオケ喫茶に行ったのが、たぶん16とか17とか、その辺なので、ホントに何か高校生で。で、すごくみんなかわいがってくれて、で、私が…私、演歌聴くだけじゃなくて歌うのもすごく好きなんですけど、あの、私が歌うとすごく『懐かしいなぁ』って言うてくれたりとか、『なんでそんな歌知ってるの?』とか、すごく受け入れてくれる感じがうれしくて。」「で、私、最初はホントに美空ひばりさんの歌しか知らなくて、なんですけど、そのカラオケ喫茶に行くと、『そんなに古い歌知ってるの?』『これも覚えてほしいな』とか『次来たら、これも歌ってね』とか、そういうふうに、こう…声をかけてくださるおじいちゃん、おばあちゃんがすごく多くて。」「で、私が歌うと、すごく笑顔になってくれたりとか、中には涙流して聴いてくれるおばあちゃんとかもいたり（笑）。握手求めてくる人もいたりとかして。そうですね、最初はお家で聴いてるだけだったんですけど、登下校の車の中とか、聴いてるだけだったんですけど、だんだん覚えて歌うようになって、で、その学校と家以外に1個コミュニティができたのが、私にとってはすごく、何だろう、気分転換というか、すごく居場所を見つけた感じがして、高校生のときは、土日はほと

んどそこに入り浸ってるぐらい（笑）、通って。今でも、『いつ帰ってくるの?』って電話くれたりとかして。そういうつながりができたのも、大きかったかなと思います。」「Dに来てからも、カラオケ喫茶みたいなのを探して、私、そういうところ全然一人で行けちゃうので（笑）、『こんにちは〜』って言って（笑）、行ったりして、そこでまた新しいコミュニティができていくんですけど、同世代というよりは、そうですね、年配の方が多くて。でも、割と孫みたいにかわいがってくれたりとか。」「<Dでも、シニアのコミュニティにいるんですね?>「そうです、そうです、そうです（笑）。<楽しいですね。>「そうですね。こう、大学に来たら、大学の友だちもいるし、アルバイト先にもいるし、サークルとかもあるし、なんですけど、それとはまた違ったコミュニティがあるのが私的にはすごく新鮮で、楽しいなぁと思って。」「<演歌以外の話や相談などはする?>「そうですね…でも、割と年配の方が自分の若いときの…私を見て、自分の若いときを思い出して、何歳のときにDに来て、何の仕事をして、今、どうしてるとか、そういう大学時代の話とか、自分の若いころの話を結構してくれるおじいちゃんとかもいて、そうですね、ほとんど聞き役に徹してるんですけど（笑）、でも、すごく勉強になることもあるし。」「<早く話が終わらないかなと思うことはない?>「ああ、思う…思うときもありますけど（笑）、でも、私、それこそ高校生のときとかからずっとそういう環境でいたんで、何か割と、お年寄りの…年配の方の話を聴くの、慣れてるといえるか。そこから学ぶこともあるし、ま、いろんな生き方があるんだなぁとか、視野が広がる部分もあるので、勉強になるなって思ったとこだけ、こう吸収しつつ（笑）、半分聞き流して…みたいな（笑）。同世代の人たちとの関わりだけだったら、たぶん、知らなかった世界もあるし、勉強になることも多いので。」「自分のお孫さんの話をしてくれたりとか、それこそ、今、同じ大学生なんだよとか。お孫さんがいない方とかも、その分、孫のようにかわいがってくれたりとか、そう

いうのもあるし。あとは、おじいちゃんとかとデュエットソングを歌うと喜んでくれて（笑）。『若いパワーもらった』って言って喜んでくれたりとか、ちょっとお小遣いくれるおじいちゃんもいたりとかして（笑）。そうですね、割と世代を問わず、ですね」。

3. ファン心理の宗教的信仰化の側面に関する語り

「美空ひばり記念館とかも、Dに来たら絶対に行きたくて、念願叶ってやっ行ったたりとか。あと、Dにブロマイド屋さんみたいなのあるんですけど（笑）、今日持ってきてるんですけど、お見せしようと思って（笑）。そんな頻繁には行かないんですけど、（数枚のブロマイドを提示しながら）『かわいい！』と思って、こういうの、映画のときとかだと思うんですけど、こういうのをたまに買いに行ったりとか（笑）。」「1枚、いくらだろ？でも何百円とかだと思います。」「全然高くなくて。使ってるお金でいったらそんなに使ってないですね」。<美空ひばり記念館は？>「当時乗っていた車とかが、そのまま置いてあったりとか。あとはお部屋の感じとかも、そのまんま。ピアノとかもあったりして、残ってる。で、仏壇があって、拝んで（笑）。そんな感じでしたね。」<グッズは売っている？>「売ってます、売ってます、売ってました（笑）。それこそ、DVDとかもあったし、CDとかもあったんですけど、定価で買うとちょっと高いので、あの一、お箸、お箸があって、『美空ひばり』って書いたお箸があって、それを、今、私、使ってるんですけど（笑）。」<美空ひばり箸（笑）。>「そうです（笑）。あと、ハンカチとかもありました。ハンカチも持っているんですけど。」<どんなデザイン？>「美空ひばりさん、紫が好きで、紫の、こう…素材に、あの、『悲しき口笛』？、あの歌ってるときの衣装。」<シルクハットの？>「そう、黒いシルクハット、あれのシルエットがついた（笑）デザインとか、結構かわいくて。そうですね…あとは、当時、あの一、ひばりさんがつけてたオレンジの口紅があって、映像とかでもよく見るんですけど、あのオレンジの口紅復刻版みたいなのも売ってたりして

（笑）、さすがにそれは買わなかったんですけど（笑）。そうですね、結構いろいろ売ってましたね。」<ハンカチは、大事大事に使ってるんでしょう？>「大事すぎて使えないです（笑）。」

4. ファン心理と集合的記憶・ノスタルジーに関する語り

<ナントカ狐御殿っていうのは見たことがあります。白黒でした。>「ですよ（笑）。」<それもケーブルテレビか何かで深夜にやってる。>「アハハハ（笑）。そうなんですよ、だからもう、タイムスリップしたような感覚ですよ。」<『和』が好き？>「『和』が好きなのもあるし…何かこう、古いものって、私たちの世代にとっては一周回って新しいというか。こう、今の時代にリアルタイムでこう生産されていく新しさじゃなくて、どんどん遡っていくと、それはそれで、こういう感じだったんだ…そういう違う…現代とはまた違う新しさがあって、私にとってはそれがすごく新鮮で。それこそ映画の中のセットとか、衣装とかも、現代だったら浮いちゃうような感じのでも、その映画にはすごくなじんでいるし、世界観として成立してるし、それはそれで新しいな、っていうふうに感じる場所もありますね。」<同じものを現代版でリメイクしてもダメ？>「うーん、どうなんですかね…。私は、でも、うーん、リメイクすると世界観が崩れちゃうとか、あるじゃないですか。それこそ、ちょっと話は変わりますが、アニメとか、そういうものを、こう実写化したりしても、賛否両論あるのと同じで、そこは好き嫌いは分かれるのかなとは思いますが、私、個人的には、別にリメイクしてほしいとは思わなくて…そうですね、当時のままを楽しみたい方が強いんです。<美空ひばりさん、紅白歌合戦でAIで復活しましたよね？>「ありましたね！ありましたね（笑）。私は、あれ、特集されてたときから見てたんですけど、なんだろうな、面白いなどは思ったし、批判するわけではないんですけど、うーん…私はそもそもその時代を生きていないので、こう、たぶん、ホントに今も現役でずっと若いときから追っかけをして…とか、ファンクラ

ブに入ってってという世代の方から比べると、思い入れって、そんなにないですよ。なくて。でも、たぶん、特集されてた中でも、そのファンの年配の方が話されてたように、やっぱり、そういう世代の方たちに対しては、もっと特別な存在で、自分たちと一緒に、その激動の時代を生きてきたわけで。そういうのをAIが…AIが取って代われないだろうなっていうのも感じはしました。けど、個人的には面白いとは思って、それがきっかけで、また、たぶん、美空ひばりさんを知る人もいるだろうし…っていうのもありますけど。そうですね。」<AIで復活したひばりさんの楽曲はどう思った？>「楽曲は、えーっと、歌詞がすごく好きでした、私は。楽曲としてはすごく好きで、セリフとかもあって、今、生き返ったというか、今の時代に、ひばりさん…美空ひばりさんがいたら、たぶん、こういう歌を歌ってたんだろうっていうのは、こう、イメージがつく部分もあって。そうですね。楽曲自体は、好きでした。」<もし、今、ひばりさんが生きていたら、コンサートに行ってみたいですか？>「行ってみたくて、もうホントに、生まれる時代を間違えたと思ってて（笑）。アハハハハ、ホントに。でも、DVDとかで見るとは、なんでですけど…。絶対、たぶん、私、昭和に生まれてたらファンクラブ入ってたし、追っかけてたし、絶対そうだったろうなと思いますけど。でも、亡くなったニュースとかを、お父さんは小さいときに亡くなったときのニュースを見た記憶があるって話してて。で、それこそ、お父さん自体は、何かそこまで別にファンだったとかではないけど、もう、大スターだっという認識はあったし、すごい重大なことが起きてるんだろうっていうのもわかってたって、幼いながらもわかってたっていうふうに話してて。たぶん、私、そのときに生きてたら、ショックで立ち直れないだろうなって思ってて（笑）。」「そうですね…、亡くなってしまうからこそ、ファン…ファンとしての楽しみ方ができているというか、ある意味。」「52歳ぐらいでたぶん亡くなられたと思うんですけど、だか

らこそ、なんていうんだろうな、すごく…亡くなっ…まあ、ご病気だっというのもあるから仕方ないんですけど、その、去り際がきれいというか、美しいというか。そういう…うん。そうですね、たぶん、今も生きて歌っていらっしゃっても、声も出なくなってるし、立ってるのもやっという感じになっちゃってるかもしれないんですけど、そういう姿を見ていないので、こう、きれいなまんま、あこがれのまんま、こう、イメージがあるのが大きいかな…。<それは、現代のミュージシャンからは得られない？>「どうなんですかね。私、でも、たぶん、割と前から、美空ひばりさんにハマる前から、リアルタイムで流行ってるものにハマったことがなくて。テレビドラマとかはリアルタイムで見たりするんですけど、音楽とかそういうのに関して、たとえばアイドルでもですけど、今、流行ってるものに対して、あんまり興味を示したことがなくて（笑）。まわりを見ると、友だちとかはよく話してるのもわかるし、流行ってるんだろうっていうのもわかるんですけど、でも、かといって、好きかと言われたら別に（笑）ということが多くて。だから両親の世代の曲とかと一緒に聴く機会の方が多くて。私の両親の影響もあるかもしれないんですけど、リアルタイムで流行ってる人たちの曲をテレビで聴いたりしても、『全然わからん』みたいな（笑）。『何がいいのかわからん』みたいな、そういうのを…そういう感じのを聞いて育ってたから、うーん、確かにな…みたいなもの（笑）、あるのかもしれないんですけど。あんまり…そうですね、ハマったことないですね。<レトロな歌謡曲が好きなのはなぜ？>「曲調とか雰囲気とか…。私、もともと『和』な感じがすごく好きで。着物を着て歌っている立ち姿も好きだし、曲の雰囲気も好きだし、あとは、なんだろうな…今も現役で活躍されてる方も好きなんですけど、ちょっと昔の方に着目すると、こう、漠然としたものではあるけど、『昭和』っていうものに対する、こう、憧れみたいなものあって…。昭和時代ってすごく長いじゃないですか、戦争とかいろいろあって。そういうの、日本史で

も習ったりしたし、おばあちゃんとか、お父さん、お母さんから話をいろいろ聞いてたりすると、ま、大変だっただろうなとも思うけど、こう、漠然とした憧れもあって…。美空ひばりさんって、そういう時代とともに、こう生きてきた人じゃないですか。そういうところに対しての憧れ…憧れっていうのもあれですけど、こう…。私、平成生まれですけど、すごく平和ボケしてるというか（笑）。ここ数年はいろいろあったけど、私とは全然違う時代を生きてきた人たちだから。あとは、レコード大賞とかの映像とかも見たりするんですけど、紅白歌合戦とか、今のリアルタイムでやってるレコード大賞と重みが違うんだなとか。私はそのとき生きてないから、何とも言えないんですけど、名前を呼ばれた瞬間、号泣してる映像とか見ると、ホントに、賞の重みが違うんだなとか。そういうのも感じたりするし」。<美空ひばりのファンであることは同年代の友だちとは>「そもそも、そういう話をあまりしないというか。お互いたぶん共感できる部分が少ないので（笑）、なんだろうな、でも、最初は、それこそごく少数派だし、みんな K-POP とかジャニーズとか好きだし、たぶん、話合わないだろうなっていう…それ以外の部分では全然仲いいんですけど、そういう『推し』とか、そういうのになっちゃうと、全然話が合わないの、もうホントに仲良くなってからじゃないと…『実は私、演歌好きなんだよね』みたいな（笑）話をしてこなくて。でも、最近になって、D に来てから、すごく、いろんな人と話す機会が増えて…で、『話しちゃおっかなー』みたいな（笑）。もう、初対面から『実は私、ちょっと渋いんですけど演歌好きで』みたいなふうに言うと、『ああ、面白いね』って言ってくれる人もいるし、中にはちょっと引いて…引いてく人もいるんですけど、それはそれでいいかなーみたいな（笑）。「私、その、「ノスタルジー」っていう部分でいったら、レトロブームとかも好きで。純喫茶とか、私、大好きで。」「夏とか、友だちと遊ぼってなったら、私の友だち、みんな『行きたいとこ、ある？』とかって聞いてくる子の方が多くて、で、私、だ

いたい純喫茶、提案するんですよ。で、クリームソーダ飲みに行つて。で、そういう純喫茶とかに行くと、たぶん、その当時はホントに喫茶店てそういう感じだったのだろうなっていうのも思うんですけど、私はその時代、経験してないし、でも、「ああ、懐かしいな」って思う…思うので、それが、そういうノスタルジーなんだろうな、っていうのも自分で感じて。そういう部分でも、たぶん、古いものが好きなんですよ。」<今のレコード大賞はもう全然違う。受賞曲は、2 回ぐらい聞いたことがあるかな？っていう…>「何なら、初めて聞いた、みたいな。今の時代って、こう、メディアが多様化してて、テレビがすべてじゃないし、動画サイトとかも…私は、それこそ、動画サイトで知ったし…。でも、その、年配…ある程度年配の方々って、あんまり、こう、スマホとか動画サイトって見ないじゃないですか。ってなると、触れるメディアが世代によって違うし、こう細分化してるから、スターといえばこの人！みたいなのがなくなってきちゃってるじゃないですか。この年代ではこういう人たち流行ってるよね、でも、この世代までいくと違うよね、っていうのがあったりして、だから、そういう環境にあるからこそ、その、昭和の時代の、スターといえばこの人！みたいな、美空ひばりってみんな知ってる、そういうのにすごく憧れてて。」「今の時代は選択肢がいっぱいあるからこそ、自由だからこそ、こう、なんだろう…社会全体で見たときに、もう、スターといえばこの人！っていうのがなくなってるから、今とは違うなって思っ。そういう部分でも面白いな、って感じるし、だから、懐かしさ、ノスタルジー的な感覚もありつつ、憧れもありつつ、でも、こう、ある意味、新鮮でもあり、みたいな」。

V 考察

1. 平成生まれの若者による美空ひばりへの「推し活」

B さんは、中学校最後の大会で敗れて抜け殻のような状態になったときに、動画で美空ひばりの

「柔」と出会い、「勝つと思うな、思えば負けよ」という歌詞に強く共感して、ファンとなっている。ここでは、直接的なやりとりはないが、美空ひばりの歌う「柔」を聴いて、Bさんは美空ひばりに自分の物語が理解されていると感じ、それによって美空ひばりが伝えるメッセージに対する認知的信頼が形成された (Fonagy & Allison, 2023) ことが考えられる。また、「柔」は直接的には柔道を題材としたものだが、冒頭の歌詞は、勝負事すべてに共通する普遍的なメッセージだと言える。曖昧で一般的な表現が自分に当てはまると感じ、信頼を深める現象は「バーナム効果」(Meehl, 1956) と呼ばれ、星座占いを信用するメカニズムとしても指摘される (Huizi & Yiwei, 2022)。また、このことは、不思議現象信奉が不安と相関している (小城ら, 2008) こととも整合的である。Bさんは、「柔」を入口として、その後は美空ひばりの楽曲や、演歌の世界に夢中になっている。

Bさんにとって「推し」の魅力は、圧倒的な歌唱力と幅広い演技力 (パフォーマンス)、高いプロ意識とストイックさの一方でお茶目で親しみやすい人柄 (本人の魅力) である。美空ひばりの中に共存する男性性と女性性に惹かれていると言い換えることができる。「推し」の異性役の「カッコよさ」と比較すると、現実世界の異性が見劣りする。タカラヅカファンの研究 (上瀬, 1994) では、タカラヅカの男役に求められるのは美しさと「カッコよさ」を体現した、非現実の理想像で、現実の男性に求めている特性とはやや異なることが指摘されている。現実世界では叶わない夢を「推し」に投影しているとも言える。理想が高くなりすぎると、あるいは、自分の好みではない側面を見たくないという志向性が強くなりすぎると、現実の恋愛離れを促進することも考えられる。また、Bさんにとって映像作品は、あくまでも「推し」の演技や歌唱を堪能するための媒体にすぎず、作品自体への没入はないことが窺える。

2. 社会的共有・準拠集団の魅力

ファン心理の中では、ファン・コミュニケーションが精神的健康と正の相関が示されている (小城,

2019)。松島ら (2019) においても、キリスト教によって育まれる人間関係と主観的幸福感に正の関連があることが示されている。Bさんの場合は、美空ひばりを介して、昭和を彷彿させる文化や昭和を理解する世代の人々が集う場であるカラオケ喫茶を心理的な居場所とすることができている。この居場所で、現代大学生が日常では触れることの少ない世代の人々との交流をBさんは心地よいものと感じ、主観的幸福感を育てている。入口は、「推し」自身の魅力だが、その次の段階としてファン集団が自分の準拠集団となることが、ファン心理を強化し、維持する作用となっていることが窺われる。同じ対象を推しているという認知や感覚が、態度の類似性、居場所を確保し、役割を与えられ、自己効力感を得ることにつながることが考えられる。Oldenburg (1999/2013) によると、自宅や家族がファーストプレイスであり、職場や学校がセカンドプレイスであり、それ以外のカフェや居酒屋など、中立的でそこを訪れる者皆が平等で、会話が主な活動で、遊び心に満ちた雰囲気の特徴で、精神的な心地よさと支えを与える目立たない場は、サードプレイスと捉えられる。Bさんの場合は、美空ひばりをよく知るシニア層の集まるカラオケ喫茶がサードプレイスとなっていると言える。また、ビリーフ・システム研究の分野では、一度態度が形成されると、同じ態度を持つ準拠集団の存在が態度維持を促進することが示されている (西田, 1998 など)。Bさんの「推し活」においても、カラオケ喫茶というサードプレイスに集まる、同じく美空ひばりを推す準拠集団が、Bさんの美空ひばりへの信仰を促進していると考えられる。

3. ファン心理の宗教的信仰化の側面

Bさんが美空ひばり記念館を訪れたのは、聖地巡礼とも言える。「推し」の見た景色、「推し」のいた空間、「推し」の使っていたものを見学することで、「推し」を追体験していることが窺える。また、Bさんは「祭壇」制作までは行っていないが、「美空ひばりハンカチ」などのグッズを大事に保管しているのは、心理的にはご神体を祀る行

為と同義であり、グッズを携帯したり、毎日使ったりするのは、神仏あるいはその象徴に触れて神仏の実在を確認する点で、お守りやロザリオと同義であることが考えられる。

4. ファン心理と集合的記憶・ノスタルジー

阪神タイガース・読売ジャイアンツ、Jリーグといったスポーツ選手、タカラヅカ、大相撲などでも、祖父母や親からのファン心理の伝承ルートが見出されている（小城，2002；上瀬，1994；上瀬・亀山，1994）。一方で、Bさんの場合は、リアルタイムでの社会的共有だけでなく、メディアの多様化、動画サイトなどの動画共有サービスの登場によって、時代を遡ってファン心理が生起しているという、今の時代ならではの現象が見て取れる。すなわち、メディアが多様化、個人の嗜好性や「推し活」も個人化・多様化しているからこそ、昭和時代の演歌のファンも出現しうるのだと言える。Bさんは美空ひばりの「推し活」を通じて祖父母世代、親世代の人生の疑似的な再体験をしている、あるいは、自伝的記憶ではなく、集団や社会で共有される記憶である集合的記憶（Halbwachs, 1950/1989）に触れていると言うことができる。

5. 総合考察

Bさんの事例から全体的に窺える今の「推し活」は、構造的にはソフトな宗教と言える。「美空ひばりを崇拝している」心理は、神への崇拝と似ている。また、同じく美空ひばりを推すカラオケ喫茶で出会うシニア層と一緒にいる場が、居心地がよくて、準拠集団になっていくというのも、宗教集団と似ている。準拠集団にいて、居場所がある、自分の存在が認められ、役割があることが、精神的健康につながることは普遍的な体験であり、その集団が教団なのか、カラオケ喫茶のシニア層なのか、同じアイドルを推す仲間なのかの違いなのではないだろうか。教団には、洗礼を受ける、教区に所属するなど、明確なイニシエーションがあり、その後の活動が体系化・明文化されており、破壊的カルトではなくとも、気軽に出たり入ったりはしにくく、それが入信のハードルとなってい

るとも言える。一方、「推し活」は、イニシエーションがあいまいで、自分が「好き」「推したい」と思えば、その時点で「信者」になることができ、一方で、その立場を簡単に降りることも、他の神と同時並行で信仰することもできる。こうした同時並行的な「信仰」の様式は、キリスト教と仏教と神道を同時に信仰して、お正月は神社に初詣、本来のキリスト降誕祭からはかけ離れているがクリスマスはパーティー、葬式は仏式といった「無宗教の宗教性」（堀江，2007）という日本の宗教のあり方と合致するものであり、「推し活」というソフトな宗教は、日本人の国民性とフィットするのかもしれない。

最後に本研究の限界と今後の課題について述べる。本研究は、一般大学生であるBさんに関する事例研究であり、Bさんが、家族関係や友人関係も良好で、パーソナリティも安定しているために、「推し活」が健全に機能している可能性がある。したがって、本研究から得られた「推し活」の宗教的信仰化に関する知見は仮説の域を出るものではなく、この仮説の妥当性については、今後質的・量的研究を積み重ねて検証される必要がある。また、本研究で得られた仮説を手がかりに、「推し活」の宗教的信仰化が人々の精神的健康・ウェルビーイングに及ぼす影響について吟味し、これをポジティブな方向に活用する術について、心理臨床実践の中で工夫していくことが今後の課題である。

<付記>

本論文での語りの掲載に許可して下さったBさんに心より感謝申し上げます。

注

- 1) 扇山藩の牧野家の雪姫と千代姫の双子姉妹として生まれたが、江戸家に預けられ男姿で吉三として生活する雪姫と、跡継ぎの千代姫を一人二役で演じている。

文献

- 江南健志・小川悠貴 (2022). アイドルの「おっかけ」は何を追いかけているのか——アイドルオタクの主観的視点からの実践理解. 仁愛大学研究紀要人間学部篇, **21**, 11-21.
- 遠藤由美 (2002). 不思議現象に対する若者の関心・実在信念の構造. 総合研究所所報 (奈良大学), **10**, 3-104.
- Fonagy, P., & Allison, E. (2023). Beyond mentalizing: Epistemic trust and the transmission of culture. *The Psychoanalytic Quarterly*, **92**, 599-640.
- Halbwachs, M. (1950). *La mémoire collective*. Paris: Presses Universitaires de France. 小関藤一郎 (訳) (1989). 集合的記憶. 行路社.
- 濱野智史 (2012). 前田敦子はキリストを超えた——〈宗教〉としてのAKB48. ちくま新書.
- 原田祐理花・小松優衣・加納里梨・吉村耕一 (2023). 「推し」活動が人の健康に及ぼす影響. 山口県立大学学術情報：看護栄養学部紀要, **16**, 1-6.
- 堀江宗正 (2007). 日本のスピリチュアリティ言説の状況. 日本トランスパーソナル心理学・精神医学会 (編) スピリチュアリティの心理学. せせらぎ出版, pp. 35-54.
- Huizi, C., & Yiwei, X. (2022). Understanding the impact of Barnum effect in astrology: An eye-tracking study. *The Frontiers of Society, Science and Technology*, **4**, 74-78.
- 伊藤 言・高野陽太郎 (2017). ファンは「神」を信仰しているか? ——ファン心理の構造とその心理学的基盤. 日本心理学会第81回大会発表論文集, **2B**-005.
- 今井有里紗・砂田純子・大木桃代 (2010). ファン心理と心理的健康に関する検討. 文教大学生生活科学研究所生活科学研究, **32**, 67-79.
- 今泉寿明 (1997). 不思議現象と精神科臨床. 菊池 聡・木下孝司 (編) 不思議現象——子どもの心と教育. 北大路書房, pp. 179-206.
- 上瀬由美子 (1994). タカラヅカファン. 松井豊 (編) ファンとブームの社会心理. サイエンス社, 53-70.
- 上瀬由美子・亀山直子 (1994). 大相撲ブーム. 松井豊 (編) ファンとブームの社会心理. サイエンス社, 73-90.
- 菊池 聡 (1995). 不思議現象が開く心理学への扉. 菊池 聡・谷口高士・宮元博章 (編著) 不思議現象 なぜ信じるのか——こころの科学入門. 北大路書房, pp. 1-18.
- Koenig, H. G., Al-Zaben, F., & VanderWeele, T. J. (2020). Religion and psychiatry: Recent developments in research. *BJPsych Advances*, **26**, 262-272.
- 小城英子 (2002). ファン心理に関する探索的研究. 関西大学大学院『人間科学』—社会学・心理学研究, **57**, 41-59.
- 小城英子 (2004). ファン心理の構造 (1) ——ファン心理とファン行動の分類. 関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究, **61**, 191-205.
- 小城英子 (2019). ファン心理再考. 聖心女子大学論叢, **132**, 55-97.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2007). ブームとしての不思議現象 聖心女子大学論叢, **109**, 33-74.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩 (2008). 不思議現象に対する態度——態度構造の分析および類型化. 社会心理学研究, **23**, 246-258.
- 刘莹皓 (2022). 「オタク」と「リア充」. アニメ, アイドル, ファッション, スポーツ, ヒップホップなどのサブカルチャー・アイデンティティとそれに関連する心理的結果. 日本心理学会第86回大会発表論文集, **1A**M-025.
- Maltby, J., Day, L., McCutcheon, L. E., Gillett, R., Houran, J., & Ashe, D. D. (2004). Personality and coping: A context for examining celebrity worship and mental health. *British Journal of Psychology*, **95**, 411-428.
- 正木大貴 (2023). 「推し」の心理. ——推しと私の関係. 京都女子大学大学院現代社会研究科紀要, **17**, 53-62.

- 松島公望・林 明明・荒川 歩 (2019). キリスト教信者におけるキリスト教的宗教意識と主観的幸福感との関連 —— ローマ・カトリック教会とホーリネス系 A 教団を対象にして. *社会心理学研究*, **35**, 39-49.
- Meehl, P. E. (1956). Wanted: A good cookbook. *American Psychologist*, **11**, 263-272.
- 中村雅彦 (1995). 大学生のオカルト信仰に関する研究 —— オカルト信者の社会心理的特性と超心理教育による社会観の変容. *愛媛大学教養部紀要*, **28**, 29-55.
- 西田公昭 (1998). 「信じるころ」の科学 —— マインド・コントロールとビリーフ・システムの社会心理学 (セレクション社会心理学 18). サイエンス社.
- 西川千登世・渋谷昌三 (2011). 音楽ファンのコンサート参加行動による精神的健康度への影響 —— 参加頻度による検討. *目白大学心理学研究*, **7**, 45-53.
- Oldenburg R. (1999). *The great good place: Cafés, coffee shops, bookstores, bars, hair salons and other hangouts at the heart of the community*. New York: Marlowe & Company. 忠平美幸 (訳) (2013). サードプレイス —— コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」. みすず書房.